
サケはどのように生まれた川にもどってくるのだろうか？

10月も下旬になると神通川などにサケが戻って来るようになります。地図もないのに長い航海をして生まれた川へ戻ってくるとはなんとも不思議ですが、どのような仕組みがあるのでしょうか。

サケの一生

サケは、産卵のために川に戻って来ます。本来はわき水がでるような砂利の川底に穴を掘り産卵しますが、今の日本では、川へ入ってきたサケの大部分は卵をとるため途中で捕獲されます。捕えたサケから卵を採取し、精子をかけ、稚魚になるまで飼育してから川へ放流します。稚魚は、春先の雪解け水で増水した頃に川を下り、海へ入っていきます。6～7月に日本の沿岸を離れたサケの幼魚は、翌年の夏にはもう遠く離れた北太平洋の海で生活していることがわかっています。アラスカ湾まで行くものも知られます。1～3年間は、太平洋で北上や南下を繰り返して成長し、親になると日本への回遊が始まります。4～5月には北東太平洋にいた親は、8～9月には東カムチャッカ沖合いからアリューシャン列島まで回遊し、その後日本各地の川へ向かうことがわかっています。親は、生まれた川に帰り、産卵しその一生を終えるのです。

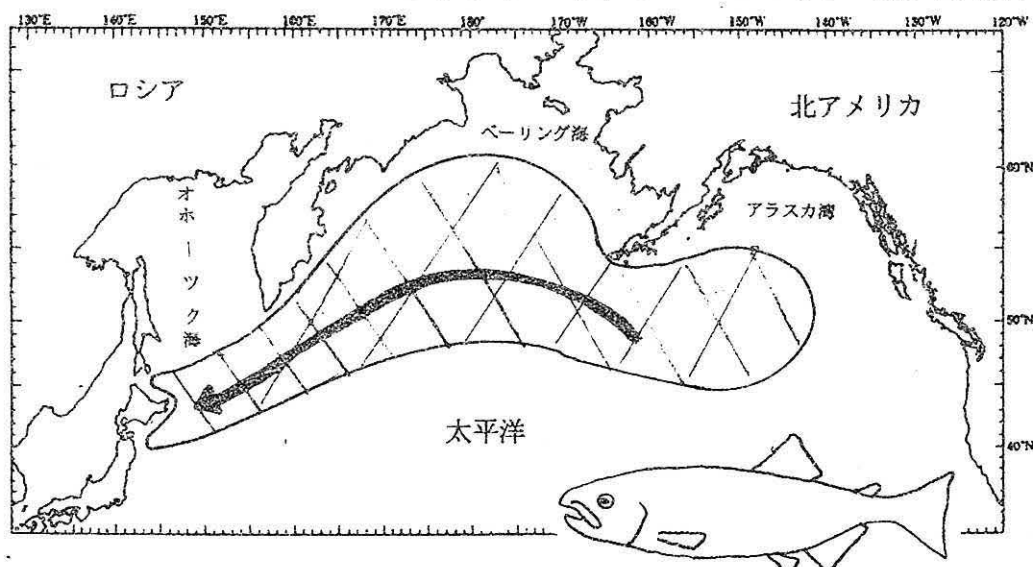
どのように生まれた川へもどってくるのだろうか？

日本の河川で生まれたサケが何千キロも旅をして、再び生まれた川へ戻ってくるのはたいへん不思議な現象です。サケの幼魚が太平洋へ向かう時や、成長して回遊してくる時は、太陽の位置や地磁気、海流を利用し、生まれた川の付近までやってくると考えられています。最近では、視覚（目）も関係していると言われてはいますが、詳しいことはよくわかりません。

沿岸に近づき、生まれた川へもどる仕組みは比較的よくわかっています。北海道での調査では、沿岸に戻ってきたサケのうち、98%が生まれた川へもどり、残りの2%が他の川にのぼったという報告があります。生まれた川の近くに戻ってきても、いくつもの他の川が海へ流れているのに、な

ぜ生まれた川を見つけることができるのでしょうか。その答として、においをかく能力が重要な役目を果たしていると考えられています。沿岸までもどってきたサケの鼻をきかなくして放流したところ、生まれた川に戻ってこれなかったという調査結果があります。サケは、稚魚の時に、育った川のにおいを覚えていると言われています。海で成長し、生まれた川の河口付近に戻ってきた時、生まれた川のにおいに刺激されます。においのする方向に流れをさかのぼり、生まれた場所まで到達します。幼い頃のにおいの記憶をたよりに生まれた場所に戻ってくるのです。

富山県では、北太平洋から長い旅を終えてやってきたサケが川をのぼるのは、10月から12月まで続きます。体長60cmにもなる大きなサケが水面にひれをたて川をさかのぼってくる姿を見ながら、長い旅の途中にどんなできごとがあったのか想像するのも楽しいことです。（南部久男）



日本のサケの分布と戻ってくる時の回遊のコース（推定）
 -日本のサケマス、その生物学と増殖<たくぎん総合研究所>より略写-



富山市科学文化センター

〒939 富山市西中野町1-8-31

TEL (0764) 91-2123 (代表)

平成6年10月1日